復興を歩む vol.16 長期宿泊始まる

7月から始まった長期宿泊。7月26日現在、141世帯（318人）の届け出を受け付けています。当初から村内で生活を始めている家庭はごく一部で、多くは避難先と村内で交互に滞在し、片付けなどが進められているようです。「年老いた両親が早く戻りたがっているので準備をしています」という人に会いました。また別の人からは「避難先で農業を再開中。来年帰村するつもりだが、今年は避難先にいる」と聞きました。中には、「福島市に家を求めたけれど、孫が村の学校に通い続けるなら―と考えたり、決めきれない」という声も聞きました。5年が過ぎ、仕事や家庭の事情が変化しています。暮らしの移行には、いくつものハードルを越えなければならないのが実情です。

菅野元一さん・クニさん夫妻（宮内）は、7月半ばに長期宿泊を申請。自宅を大きく改修中で、工事が終わり次第、まずは2地域居住をしながら、帰村の準備を整えていこうと考えています。8月には、新しい住宅で、元一さんの両親、昌基さんの卒寿（90歳）、トシ子さんの米寿（88歳）を祝う予定です。

既存の母屋につなぐ形で増新築している部分には、居久根の心材を使いました。平角材を縦に並べてパネル化する「縦ログ構法」を採用しています。環境省による除染事業の伐採の他、森林組合に依頼し、合わせて約90本のスギを切りました。また、皮引きには多数の知人が駆けつけて協力。1本ずつ放射線量などの測定を行い、製材所へと運びました。「屋敷の木には意味がある。もしも使えるならと模索した結果です」と元一さん。「風評に立ち向かえるのはデータ。きちんとしたデータを記録し発信も行う。知識も武器になる。村の将来に生かせる知恵を、皆で出し合っていきたい」と話します。

7月中旬。キッチンやリビングの内装工事が進められていました。左の写真は、クニさんが代表となり、夫婦が協力してナツハゼの栽培と商品開発に取り組む「ニコニコ菅野農園」の作業場となる部屋のロフト部分。友人宅の居久根のスギも一部に使っています。「誰もが気軽に立ち寄れる場所を作りたいですね。避難先で続けてきたナツハゼの栽培は村内でも再開させます」とクニさん。元一さんが「まれに見る未来志向の女性」と言うのも納得です。